

野田秀樹 シンドローム



野田秀樹 シンドローム

而立書房

野田秀樹シンドローム

1984年9月5日 第1刷発行

定 価 1000円

著 者 野田秀樹

発行者 宮永捷

発行所 有限会社而立書房

東京都千代田区神田神保町1丁目20番地

振替・東京9-174567/電話 03(291)5589

印 刷 文栄印刷株式会社

製 本 大日製本印刷株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。 0074-0713-3359

©Hideki Noda, Printed in Tokyo, 1984

目次

病の床のも書き	2
テンサイは忘れた頃にやっと狂う	5
五万分の一の地図を持った男	6
初夜	9
本陣殺人事件	12
中耳炎	18
激突 サラダ vs 煮込み——世紀末試験 1——	24
激突 僕 vs 天才——世紀末試験 2——	29
激突 無茶 vs 番茶——世紀末試験 3——	33
現代を十倍楽しく死ねる方法——世紀末試験 4——	38
テンサイは忘れた頃にやっと狂う	43
男が化粧するとき	47
障子の国のティンカー・ベル	63

病の床のも書き

情熱で舞台に立ったことがある。

情熱の温度は、 $39^{\circ}2'$ だった。そのうえ、情熱は僕の頭をモローとさせ、僕の腰をくだけさせた。コトバで、情熱ときくと、健康的で 7000° ぐらいありそうな感じだが、実際はそうではない。ほとんどの場合、情熱は、病的でかつヒジョーに微妙な温度差で決まる。

小、中学校への情熱などというものは、 $36^{\circ}8'$ では行かなければならない、という情熱で行く。しかし $37^{\circ}2'$ もでると、もう、しめたぜとばかり学校へ行かないですむ情熱である。つまり、小、中学校への情熱は、どうも、 37° あたりにあることがわかる。

大学生あたりは、 $36^{\circ}4'$ ぐらいでも大学へ行く情熱を失う人が多い。なかには、低血圧で、毎朝 $35^{\circ}4'$ ぐらいの情熱しかもてず、大学へ行くのをオックがって、そのまま眠ってしまい、起きたら芝居をやっていたような人もいる。劇団の音楽をやる人に多い。

とにかく大学への情熱は、かなり低く $36^{\circ}2'$ ぐらいではないだろうか。

さすがに社会人はエライと思うのは、会社への情熱が意外に高いことである。

37° 5' が平均で、大手商社会社になると、38° ぐらいの情熱である。

37° 2'、37° 3' でいどで会社に行かないようでは、会社に申しわけがたたない。つまり、会社への情熱は、いまひとつ弁解済みであり、申しわけていどの情熱である。

しかし、とりあえず生活もかかっているので、会社への情熱と申しわけていどの情熱は、37° 5' ぐらいのところであつて妥協しているわけである。

これが、遊びへの情熱となると、グッと高くなるのが人間である。

37° 8' ぐらいならば

「大丈夫、38° あるわけじゃないんだから」

といつて湘南へでかける。

38° あつたとしても

「大丈夫、38° 5' あるわけじゃないんだから」

といつて野球観戦に行く。

38° 5' あつたとしても

「大丈夫、別段、死ぬわけじゃないんだから」
といつて飲みに行ったりする。

死んでしまつてからやつと

「あいつ、ちょっとムリしてたもんな——」

などというお悔みをもらうのである。

とにかく、人間の遊びへの情熱の高さは、足腰がたたなくなる⁴⁰近くにある感じだ。

「人間は遊ぶ動物である」ことが、よくわかる。

なにを、どうして、こんなにもくどくどと情熱について書いているかといえは、実は、この一週間、ずうっと、³⁷2'ぐらいの情熱があり、今日になって一気に³⁸6'まで情熱がふきだしたので、それで情熱のあるうちに、情熱のある文章をモーローとして書いてみたのである。

ハナシは違いますが、

僕の夢は卑怯者になることです。

テンサイは忘れた頃にやつと狂う



五万分の一の地図を持った男

「海の向うでジョン・レノンが死んだ」らしいと日本の夕刊フジが騒ぐ。

騒いでいるから原辰徳のホームランよりも大変なことなんだろうとジョン・レノンのジの字も知らぬ爺さんまでが騒ぐ。

爺さんが騒いだので婆さんも騒ぐ。

婆さんまでが騒ぐからこいつはよっぽどのことだとますます新聞の活字は大きくなる。

新聞の活字がますます大きくなったので只ならぬことと爺さんはもう一度騒ぐ。

爺さんが二度も騒いだので婆さんも二度騒ぐ。

婆さんが二度も騒ぐから、な、な、なんなんだと新聞社が劇画と化す。こんなことなら最初から「な、なんと、あ、あの、ジョ、ジョ、ジョン・レノンが死、死、死んだ！」と新聞社が劇画の見出しを掲げていれば一度の騒ぎですんだのだ。

かくてジョン・レノンが死んだのはたかが一回きりなのに「ジョン・レノン死んじゃってさあ大変」ブームの風が巷に吹き荒れた。風が吹き荒れたので桶屋が儲かった。今時、桶屋ばかりであるものかとあこぎな出版社がしゃしゃり出た。ビートルズ特集の連続で出版社にんまり笑う。読者うんざりする。

うんざりどころか、ジョン・レノンが何人もいて何人でも死んだかの錯覚に陥る。

「あれ？ 今日ジョン・レノンが死んだのかな」という声が街で囁かれるようになる。

そんなこんなで、「実は、本物のジョン・レノンはまだ死んでいない」とか、「マクドナルドのハンバーガーは、ジョン・レノンの肉を使っている」とかいふ噂が流れる。

第一、海の向うの話だし海の向うのことは「らしい」以上のことはわからず、もしも誰も教えてくれないければ、ジョン・レノンはやっぱり今日もこの辺境の島国では「生きているらしい」ということになっていただろう。なのに、ああ、だのにこの無関係な僕ではさえ、芝居の稽古帰りに下北沢の雑踏で踏みつけられた夕刊フジの赤い見出しの中に、ジョン・レノンの死を見つけた。というより無理やり見つけさせられたという感じがする。ジョン・レノンの死に無理やり強姦されたのだ。どうも僕は最初からこのジョン・レノンの死というのは夕刊フジの陰謀めいている気がしてならなかったのだが、それが一昨日、南の島にジョン・レノンが生きているという情報を仕入れて「さもありなむ」とほくそえんだわけである。

僕が死んだとする。

誰も騒がない。

それじゃあ、あんまり僕がかわいそうなので少しは誰か——兄貴とか猫とか僕に二千円貸したままの男などが——騒ぐとする。けれども海の向うでは誰も騒がない。

でもジョン・レノンの死も僕の死もなんら変わることはない。つまり、肉体がこの損得勘定の世間じ

や使いものにならなくなり、呼べど答えぬといった程度の変化が起こって、翌日しめやかな葬式があって、翌々日には晴れ渡った朝がある。それは、ジョン・レノンが死んでも僕が死んでも。「それじゃあ人間、あんまり空しいじゃない」という発言はお酒の席だけにして欲しい。

「ジョン・レノンは南の島で生きている」というのは、もしも今ジョン・レノンが生きているとすれば、まだジョン・レノンが死んだという情報の伝わっていないどこか南の島だという私の推理に始まって「俺のいったことはまちがいないんだ」という私の自信で終わっている（つまり私自信の話だと、しやれを言う気力はない）。

ビートルズにしてもジョン・レノンの死にしても海の向うから突然あつかましくやってきて、私の人間形成に五万分の一ぐらいの影響を与えている。五万分の一というのは、日本地図を見てもらえれば分かるように、かなり大きい方なのじゃないでしょうか。ビートルズは私自信の好き嫌いを無視して、あるトキは喫茶店のウェイターが運んでくる口笛に姿を変え、またあるトキはビートルズに影響をうけた日本の演歌に姿を変え、とことん乱れた風俗の仕掛人に姿を変えたりして、とにもかくにも僕をうならせるだけのことはあるのだ。

だから、たかだかジョン・レノンの体に鉄砲の玉で穴が開いたくらいで死んでいるわけはなくて、ジョン・レノンの五万分の一の地図を持った男というのは、まだまだ「南の島」には少なくとも五万人以上はいるだろうから。ジョン・レノンは死んでしまっただけからの方が一人よりも大きくなっているのではないでしょう。

『音楽の手帖』「ビートルズ」81年5月10日

初夜

吉祥寺のJ A Z Z酒場とか下北沢のJ A Z Z喫茶とか

そんなところで耳にするのがJ A Z Zだと信じていた五年前があつて

僕は生理的にうけつていなかった。そういう若者文化発祥の地ではJ A Z Zという音楽を聴きながら若者は体を小刻みに女々しく揺さぶりながらまずいコーヒーもオンザロックも一様にズーズーすすりながら

とっても暗いあかりの下で本を読んでいるふりをしながら結局、何をしているのかわからない。

とにかくイイ加減な姿というのが生理的にイヤでイヤで仕方がなかった。J A Z Zを聴きながら

「な、わかるだろう、な、俺苦しいんだよおう、うっうっ」

と語尾がむせび泣きに変わる資格などがてめえらにあるか

コトバの語尾でむせぶなどというのは、三つで両親死んで貰われた先が朝鮮人部落で七つで顔面に大ヤケドをして

十二で女に強姦され

十五で新聞配達と牛乳配達と郵便配達を三十分以内にして

昼間は明るい顔をしている青少年だけが夜中に始めてさめざめと、枕に顔をうずめて

「こんな一生があつていいのかよおうっうっうっ」

と語尾が変化する特権を持ち合わせているのだ。

だから吉祥寺などという街同様に

その一角のJ A Z Z酒場でその一隅にある人間どもの愛しているらしいJ A Z Zなるものに僕はあつ
さりと

「はい、こいつらみなインチキ」

という烙印を押してしまった。

かわいそうなのはJ A Z Zだった。

彼には本来責任はなく思い返すだけに悪いことをした。

彼は今、私の思うところではとってもいい奴だという気がする。

つまり、ホンモノという奴の囲りにはインチキ、ニセモノ、マガイモノ、カンノワルイブスなどが集
まってきた、お友達の顔をしたがる。

だからJ A Z Z君も苦勞しているのではないか

一例を挙げれば、吉祥寺と似た街でブندانなんていう街があり

そこの若者なんかも、なにかつうとJ A Z Zをひきあいに出したりする。

もそつと奥ゆかしく聴いておればよさそうなものにと思ったりする。

ああだ、こうだと

「うつつうるさい！」つつんだ。

だから頭にのつて出版社がジャズ特集などを組みたがるけれども、あんなものが

「えっ一体何になるっていうの」

あんなものに書く奴の気が知れぬ

ああやって人間はダメになるイイ加減になる。

と思ひながら

仏壇の前に座った或る日

ソニー・ロリンズの

オン・ア・スローポート・トゥ・チャイナつつうのが聴こえてきて

僕は体がうきうきしてきてまるで吉祥寺の若者みたいにゆっさゆっさとやり出した。

ふりむくと

二つにならない甥の威一郎君まで一緒に浮かれて踊っていた。

血は争えないと思うと同時に

JAZZとも争えないと思った。

それで僕はあれほどかたくなに守ってきたJAZZまくをすてる決心をした。

その晩私はJAZZに体を許した。

『音楽の手帖』「ジャズ」81年6月10日

本陣殺人事件

おせっかいな話だが

大岡信という人は、まだ漢字もろくろく書くことができなかった夏休み明けには昆虫採集を提出しながら

ふとその表紙を見ると

「おおおかまこと」

と書いてあるので

「僕の名前は『お』が三つもあっておかしい。

それもよくよく見ると

『おかま』の前に『お』が二つもあって恥ずかしい

まるでどもりのおかまみたいだ」

といういたたまれない劣等感に

人知れずさいなまれてはいなかっただろうか。

もしそうだとすれば

なんて繊細な少年時代を送っていたのだろうと感嘆するし

かりにそうでないとしても

なんて大胆な少年時代を送っていたのだろうと感嘆する。

とにかく大岡信という詩人の少年時代を思うと感嘆することばかりである。

大変勝手口の話で恐縮ですが

私の頭の中では

「おおおかまこと」と「ウディ・アレン」は、劣等感という結び目でりぼん結びをしている。

ウディ・アレンが、りぼん結びをしている姿は、さほど私を驚かさないけれど、

「おおおかまこと」という人が、髪の毛をピンクのりぼんで蝶結びしている姿を思うと、私の想像力も満更ではないと思う。

さて勝手口の話からお座敷の方へと話を案内すると

「まあまあ今日はよくいらしたわねえ、あんたなんかがこのユリイカに」

「ほんとよくも来れたものねえ」

と挨拶も手短に

「ウディ・アレンの反意語を、ひとつ挙げてくれ」

とお茶菓子すすめられた。

「ユリイカ」です。

と答えも簡単に矢継ぎ早に質問の飛び交うお座敷で

「因みに野田秀樹の反意語をひとつ」

とまたお茶菓子をすすめられた。

そこで

「誠心誠意、真心をこめてユリイカにものを書く神経」

と答えるや

手元からお茶菓子が、すっと遠のき

突如

座敷の中へ頬っぺにごはんつぶと毛虫をつけた、やあさんが入って来た。

「てめえ、ユッユッユリイカを婦女暴行するとユッユッユリイカ！」

（注：明らかに最後のユッユッユリイカ！ は、ゆっゆっ許せねえ！ の誤訳、または私の記憶違いである。）

「まあまあお静かにお静かに。お座敷に芸者を呼んだ覚えはあっても、君らと呼んだらもっと面白い
と思って呼んだのだ。さあ、飲めや唄えや兄弟仁義だ」

と慌てて私が分脈をとり乱すと

やあさんは裾を正して正座した。

にこやかな雰囲気をかもしていたお座敷は、一転してなごやいた。